繪本東越軍記 初編 四

へ滝3
2258
4

池清

へ 13
2258
巻 4

飜譯書
倭軍書　繪本
唐軍書
隨筆物　書キ本
國々名所　滑稽物
近世戦争書類

曲亭馬琴之作
其外諸先生作
軍書
敵討
諸家騒動
御捌物

右之外數品御座候間御覧之程奉願候也

書物貸本所
東京牛込細工町
誠光堂　池田屋清吉

繪本甲越軍記巻之四

目録

晴信初陣高名之事 并 海野口夜戦之事
晴信夜攻設備之圖
晴信雪夜再寄海野口圖
其二
晴信陥海野城圖
平賀源心害妻子圖
信虎家臣[illegible]調議之事 并 五[illegible]

平賀源心戦亡之図

晴信葬源心首級図

武田家老臣密議立晴信図

繪本甲越軍記巻之四

晴信初陣功名の事　并 海野口夜戦の事

信州海野口の城塁堅固にして落ざれば深雪途を埋み老馬に道路を求るためしなれば横に車を押し武田信虎も流石に攻あぐみて引退かくて国の嫡男晴信殿は殿に残りて先陣までに三里の外に引とられし由聞へさりぬ後殿なりとも引返し三百余人の勢を三圃に備へ首尾をてに相図の用意なりし。鉄炮を離まで遠く後陣に下て鋒くならしてくしまる引ぬるべき味方に近く此殿の備立の様を知りて斬る大将に歎いでぬ慕ひ来るものとぞ今夜とく備ゑよと無用の力を費ぞせさそのなるをと空しき者もあかなれ其日雪降り路を埋ていよ〳〵拙しく歎きし味方の風雪に行悩みてる敵に疲兵を挫くび

甲越
91

追ふに幸も討ずともせざるに却く陣を班し先登く村を移しけるひ。行路稍く遠さまにも四里許引あふられ今寫西に乗じ東の莫背し来れなりつ今宵は此地に野陣を毛し。一夜人馬を息むへしと鐵に陣を張あめる。此とき板垣駿河守信形は勇氣武術に於ては武田が家の上首と人の下風に就ざる豪傑なる者なれば平伏して申けるは此地に宿陣本土人幸甚よ縁しうるる滿雪とくぬかるみにて此所謙滅を隔る事僅く四里に滿ざれ。豪さるに敵将今日細作を以味方の引き陣場の地を熟と見届として貢べきや既に御本陣を八里の外に引あひ後陣と其間三尺里を離まれば所に陣しあるに支間者立帰て注進せるは必定なり源むさ氣の進疾さ右兵との中に敢ざりなれば懸ひ遣んも計ず。縦味方に夜討を防ぐ用意ありとも絶日雪に凌いで引離くする軍兵僅に三百人に満ざる激勢揺機

分離して敗北仕らん事疑ひなし。其時に後殿せよと来あひしも水の泡也と清る世御館も敬くに罵りあふべし。止る時は進り引退る時を苦しとて疾に引これ我軍家第一の闘をおあるへと血眼に成て諫めける。晴でも信形が三で我に激怒するを見るとも自の図に主て追撃せざるの必何余夜中に攻来るべき謂まさし。其上にも絶日風雪を犯し北越なるの事に精ひ労して我ぞに斯囲る上からは士卒の疲労然ぞそと先ゆまで令は中く一寸も進まず。甚悟て労まで了承て思ふ信形焦燥て日暮れども雪あるの紛く道向し今一息急げの不に追着のてくして御若年とみやすみ殿令年十六歳。三方大将を承のあて御身とつて斯懦弱に見へ給ふ何支ぞや。二三里の行路に行労此後大敵と國争ひの合戦ちお成るれや。噫子と親ずるこて觀に如べくと濃館

平素晴信が物の用に立べしと仰らるゝ事今日思ひ当りて館を出る時の五若
年になりし時しが府を三月三歳も甲冑を脱がざる事数回なりしに。
労を忍びあの人為作を見るなをしても糸まで雖ども其様かる大
振舞して。婚姻陣親子が宜しく思しをも存ぜんと帰る者すくなく
其身耳にを更に安ぜずなく人が何とも増べく家のを労まして猶に
也近臣に物具解せ兜を枕として側に所あひ宜べ信者も忙ぎ果みて
又ろ殿の育状るふと今その讀の文も起らんき其座を立て退たる。
此しも晴信ゆるゝと兵粮を以て休息しの人も少女も共に甲冑を脱
焼火をかゞし皆く寒気を防ざる夜半の比なり陣中寂寞として
精その節に諸軍睡眠に落んとする時晴信の臣高坂弾正今井市郎
来る民部が帰ら早く来まして寄人を両人陣の前に所居たりしが市郎

民部是をみて大将の在れ所へ来りて見まへ晴信御身には黒糸の胴丸具足にて
金の耳割輪せし黒の陣笠腰には四半に大麦の腰指さし具足櫃に尻
うちかけ籠手の紐結びゐがら両人に向ひ物頭の士をよび来れ早くと宣ふ
両人承りて近習の人々と共に士大将物頭の面々を呼寄に奥来房各何事
の起りしやらんと本陣に駈付大将の出立を見て驚き何事かありしと
晴信諸臣左右に向ひて面々催今よりぞ此人数を以海野口へ出張すべし。
源氏が城に攻かゝらば此程より我軍の勢を攻て引つる城兵が
油断の一に不捨切り棄べし。吾今般の合戦に平国を出ざる初光なり。
容易落城しがたき故を察し其人数その時候深き途を埋るには
半途より軍勢を引揚ぐる事あるべし其時は我後殿に続て手ぬ
初陣の功名をせしめ平賀源心が法師首を剣の鋒に貫て甲国に立帰らん

晴信雪夜再寄ニ海野口

本甲鐡を出づる㒵初より思ひ設るが目指引拉ゑと成るべき要路よりこそ引來し。城を攻落んと兼て期してあればこそ。走取迯習の者に命じ附箋紙を継合多く旗を作らせ長槍に今く持せてり。數本石民が速に長槍の中なる紙旗を取出し本意としあるに民が作に志て紙旗三百餘取出しければ。晴信作出されたる數本石民が今井市郎が如く若手の者をすぐん連と成り。其勢百五十人各心一致にし味の大手より攻かゝる。板垣駿河守は信尾張守と道の後に在て。其勢五十人に紙旗を押立させ雪の中へ旗を立て要害の隈々に在て金鼓を鳴し。大軍の押寄る体にみせかけし。據兵の計畧を以て跡を亂るべし。我も百騎の兵を引率し。大手の軍勢吶喊を作り攻かゝる時城兵は大手の方へ馳集て防戦せんとせし搦手の石垣を登り城中に入火を放つて殺し。敵を今日我軍の引

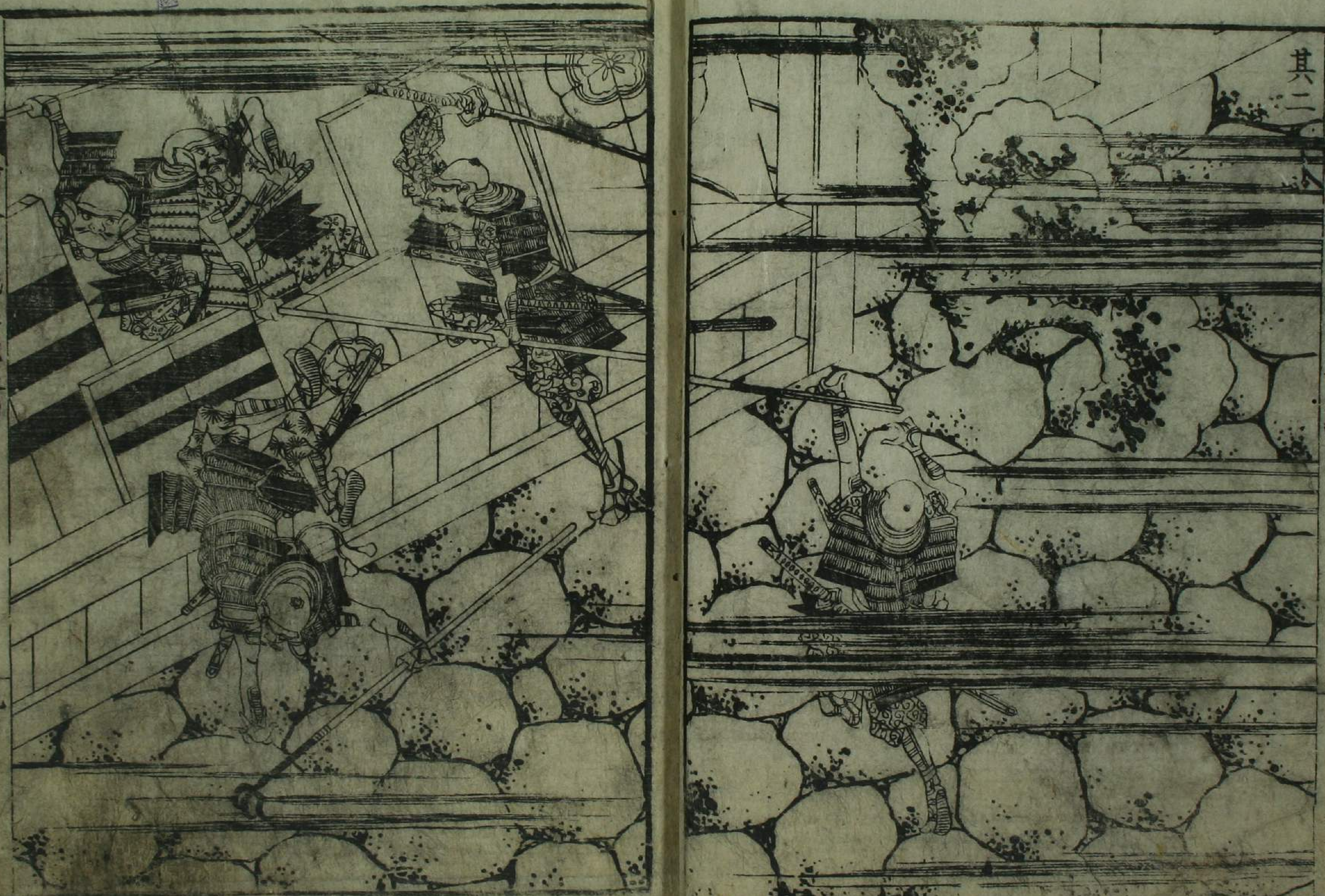
し此間海を汲て飼せたる小荷遠からし。先陣すでに八九里の外に遠く後殿の勢僅三百人なれば。二三里の間に陣すると謂るとも微勢を紙旗にて引し攻落しは思ひも寄ず。斯て汲の外に油断し。今日圍の解たるを汲者同の疲労一同に起り。前後不覚に寝入てんか其労不慮に攻寄餓兵忽に立たる敵も狼狽に及ぶ体せん事ならんかしと。まだ守く軍策をぞ述られける。初に議せしその者忙まに果て居たる處小板垣信形淚を流し某否の果るは言は軍中に述今度の計畧て理に叶ひたる状あり。已に魂に徹し恐まへ今宵尼十年来戦場に臨むといへども。かゝる朴樸妙算の謀計いまだ聞も及ざる所なり。愚意なしの名君を亨て事たる事。今まで弓矢非の袖にも居しぞ。御宥免下されし。此身は謹て我晴信党に

33-48
甲

也笑ひの入道が今日の忠諫なくんば関に留まらん殊に君謀者となれ
りとぞこ我を助るやしあるべからず廉恥に困て居たる時刻や梅ら謀計謀
方に謀ているあしたるかん急れ引かへせと宣ふまゝ旗の勇と兵ぞもろん
各物具一締しけ下に杖を突き馬の足休め働し除くせし引返して守す小
雪中一附むる丑の刻の半に珠外に着すれば式附平賀が滋中に云
此程まで武田家を取囲み逆寄せ三千の人数を以て数日防禦の術を尽せ
とやかくも近国無双の猛将に攻立られ大将ある士卒まで大に労れ
果たる所よ今殆武田勢の引上る油断を窺ひ斜るゝば僅に間者十人
むら紙商人の体に出立せ引返の縦蹤を細々と紛ぞ斥候為方
に立帰り先陣へ早く入丸甲まで怠りも返きさ浅殿の勢三三百人ぞろう
雪中に紛れ懼さ潜に里許引返さ半路の中に陣を取令旨一衆ハ

人馬の足疲れ果たる人数の多寡を連れ注進に涙をこぼし乍ら滅亡せんとも
此程まで大軍に取囲まれ本陣を守く堅固に守られし中にも関竜の如き雲井
に出る意地を顕し此程まで城に防戦しけるは兵の功名も残るべし
て恩賞をあたへ国鉄びの酒杯を下されけれ大将より士卒まで節級忍光
に沈酔し常に細解き寝入る宿運の程こそはかけまし都悦晴信は
古今に独歩せる名将圍に量を外されど只敵令青沙をして偵へ為
しぬ思せども必定く軍卒大半は枕のうへに夜討の勢に先ずちつ伏
嗅の者と名付る屈竟の間者二十人を出し路口の限く敵の間者或
は伏勢もなれやとて隊中自猛其備あるや否やを目付ありて小隊只
以の外に名ある酒に沈酔して前後不覚のことく注進しけるかぞさらに
賊と云に敢て支唯今の間にあうなし轟く也威下れ押寄諸方の手配

96
甲越



相図を定め同音に内城にて上られける城中大に周章し騒ぐ所
敵の寄くると思はれ一同に起あがり物具取て肩にかけ目をさまし
ながら城櫓にかけ上り四方を眺と伺ひみれば十二月廿七日夜にて闇
の夜なりしに折しもさ程より大雪にて城外の満地悉く白く朧月夜に
勢騎ておごそかに降雪の隈に見えければ旗の手風に吹ちらす雪に
映じて夥しく是最寄に城を取巻きたる敵衆の虚旗ならば城兵
相る信虎今日引退き給ひし後宿へ道筋に兵を遣し味方の
不意を攻んため備への計略を設けたりと敵の多勢に城を落されな
人々も是が為におのおの途を迷ひ斬ふ微勢ながら思ひなく働くも
あり耳臆病なる者は信虎の謀計に乗るを恐れ落城のよし
多くは逃まどふなし防戦を痛もならざりしば附入に敵兵

壮の若武者百騎ばかり真平路より大手に押寄教来石民部真先
かけて櫓の下に攻付諸軍続て石垣を登り出塀檣櫓の内に攻入や
せたる敵の下に壮なる足軽ども十人ばかり蜘蛛の壁を伝ふがごとく昇ていろに
名にし熊谷藤蔵が石垣を登て塀の手に着たる城将平賀入道が見
縁の道の上に江人三手の太刀を佩て熊皮の兜を着せしかば須くなる卑
頂頭巾を着て頭を春引しめ手には丈あまりの樫の棒を持て荏のごとく
なる鉄の八角に削て角々に筋鉄を延ばしたるを振廻と擁て城中を馳
出て敵ただ一同に寄すると大軍なりけれども味方の衆は一段と勢ひ
して防ぎけれども寄手は城を落すべき様もなく大石を投出し油断
りけるが下知まもるとも諸軍不意の軍に荒騒と夜ごと共に
宵の酒宴に熟睡し酒手頭上に上りより鎌あれみなぐ種が小手に

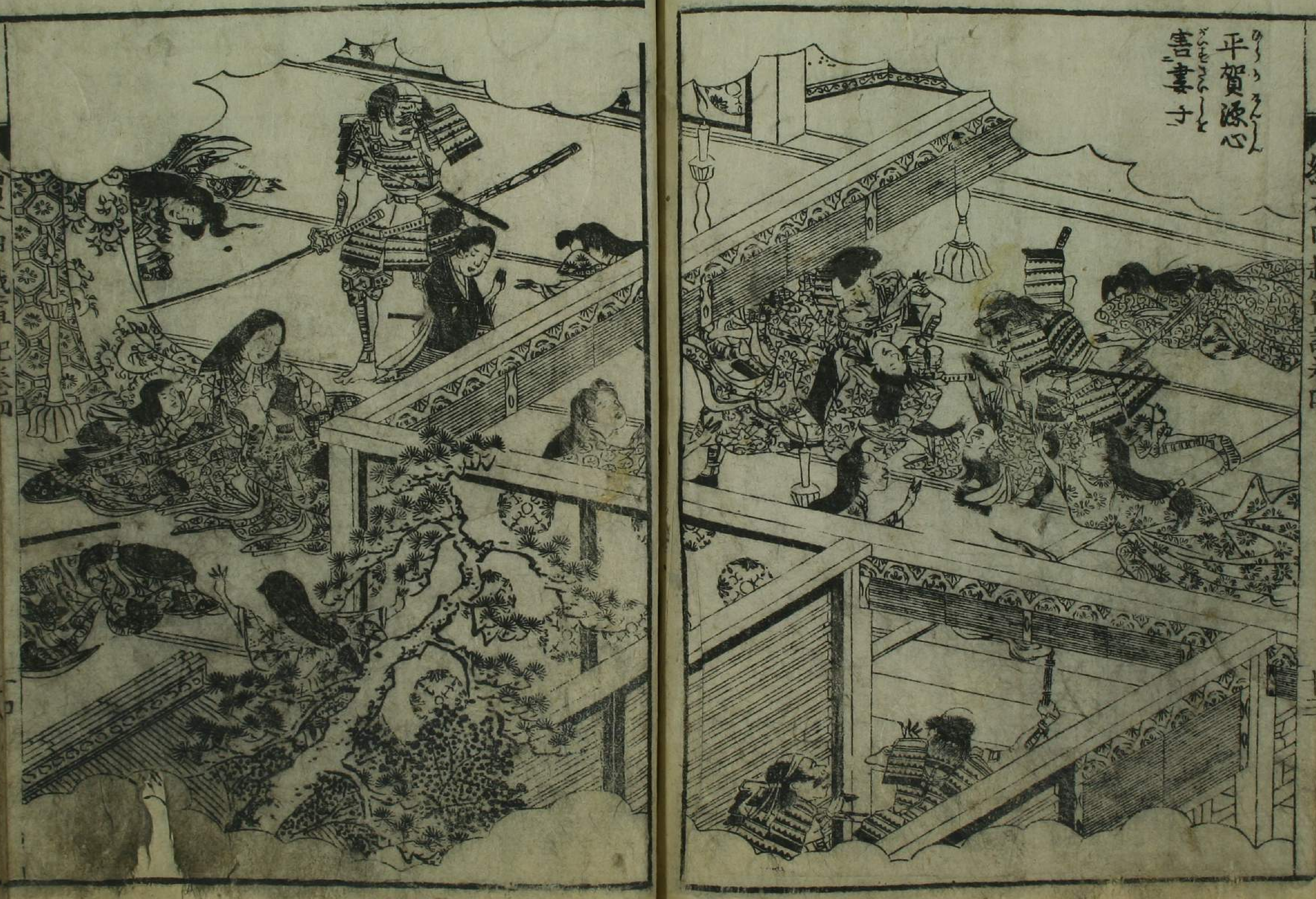
98
甲越

取張て二本石おく投落し敵城上下をせざる合たる時信玄が陣より番手ども
大手鉄砲急にうちかけ搦手よりも攻入んとの結構なりしが勝まて石垣の下に
立並び縄を振て下知しける此手の真先に萩原常陸介が旗指下に成瀬
又左衛門古川文閑左衛門何れも猛虎狂象の勇ありけるし壁に立万仭の石垣
知らけ登て萩原常陸介一番に塀の手にすかり跳り入らんとせしが櫓より
突出す兵士所を破られじと鑓を伸て兜の頂辺を志てかゝるに寒として雑兵
刎て塀の上を滑て其儘後の方へ突落しけるが萩原もさるもの鑓の柄をと
掴り其侭に引奪ひ入続て突出す鑓を長刀にて一筋ならず奪ひとりしが成
瀬又左衛門も塀の手に寄りて続き擢櫓の上より狭間の内へ又左衛門つが
兜に打かけ引付て首を取んと擢櫓の真下に引上る所を成瀬は魁して身を
躍らせ鉄手に引上擢櫓際に引付られ一跳りに躍りよる鉄手にかゝりける男
を抜打に切付しが大音声に名乗けるは雲海聖の一毫にも
て一毫首級取たるぞの成瀬又左衛門なりとて奥へ入て拝殺の中へ切て入
入首級を幸ひ大苑を散して雑兵が櫓の上に成術まで人に切立られ
上を下へと閉着せり古川文閑左衛門も人に先を越れ主僥りぬ残念し
ほどく櫓にかけ登るが萩原が出塀を蹴りかけ今ぞ此手の兵十人で
るほどく出塀より躍り入彼處其處へ火をかけしが時節西風吹起り
火煙東西に遊りて城兵今は防ぐべき術もなく城中に乱るゝと互ひに押合
踏躙り戦ふ気勢もなかりける時大手の出塀より数来れる敵に
志ける足軽ども二十人ばかり攻入大手の方にも所々に火を放ちしが火
煙風に乱れ火輪八方に飛散尺寸の間も見えずなりて今は城中
残る方なく焼亡せしかば須らく深志が城も落城に及ばんと申すも

忠義の士とし今は忽狼狽の色を起し妻子を引つれ老人を負ひ四方八隅に逃かくし落城の今と見へしかば源公相ともに戦ひ是かなはずんば死すべき命なりしが妻子をも刺殺し信虎父子が前に出合黄泉の道に同く往ぞべしと独言して本丸にかけ入妻子を尋ねしに妻は同城の住人布施兵庫介が女にて十六の女子を頭として男女の子ども七人ありしをて乙鶴とて六歳になりける男子をも残りなく刺殺し戸障子襖をなげ死骸を覆ひ火をかけ火焔熾んに燃あがるを顔もせんかた本丸より出ける既に冬の夜長しといへども漸く暁天に近ければ人の面もおぼろげに見へしかば例の樫の棒車をなんなく当るを幸い蹴たて打めぐりて流石勇み進める武田の諸軍源公が死もの狂ひの為にまた顔兜うち砕かれ或は腕を打折れ諸足を薙伏られ暫時の間に三十余人打挫

にうち倒さる郎等石氏が景政る今年十八歳武田家にて三男兵代也家柄摂津守頼光四代の孫源三位頼政の後胤大手の一番乗してうけ入自ら捨数取城中に兵七人中で突伏千変万化して戦ふ其身の平賀の道が働き無人の境に入がごとく其侍狼藉たる所へきもの拾て突かかるを源公も棒を旋し打てかかる両人ともに世もせず戦ひ何まども無双の勇力錬磨を入に透間もなかりし源公焦燥て打下しする棒の形先に鎗の物打際より打折れ一条政身を翻りかへし源公が手に残り引ながく無手と組其状一対の金剛神組合がごとく土中より涌出たるがごとく互に不悪戦ふ時を移さうち源公元来大力寂前よりの戦ひに精ぬけ疲れ脚歩揺るにて組ふしに組まるる景政上より乗かかつて押へて首をかかんとせしが数来石大音声をあげ進み寄

甲越
101



絵本甲越軍記巻四　十四

信州に鬼神とも呼れたる平賀入道源心を教来石民部景政が討取たる
をも恐れつれども是ぞ討残され残り居る者どもも今は誰か敵に
出るべきと思ひくに落失ずまた武田がたの人々追立追かけ首級をとる
数志らず庭を去かくと城て後城全く陸て落る是晴信初陣の功にしてに
處なり将かく味中の火を鎮め生一虜を先にて甲府の館にぞひ
斬く捷を献じのよしも信虎敢て賞美し給はれ源心入道を討
取たるこそよって残黨程四方にあり其身味中に在て早馬を飛しけ事
と注進し引とらしと下知を待て其ぞ引取べきと一日も城地に安堵し
て居る事能するは敵の寄来る事城恐てが故なり何ぞ是しれの事
賞するに足ぞ次郎なら斬るる者備へてその城と併成るを専要たり
晴信弱虚なるおしも憤りのかぎる心ある事なし頑の頭の厳の如やまぬ

悪まれぬるは只なる道理に源心が首を晴信君初陣の功なりと
首を捨てさせて大門峠といふ地に葬して地蔵尊の石像を造立せられける
其故に退治せし首をも源心とて聞なれども初陣に敵の首級を得るとぞの為に
退福倦吾城修せる事古今此例あり右大将頼朝卿伊豆の国にて起り
給ひし時八牧判官を夜討し其首を得るのはじめがこれ為に走湯山の
開架に揮て法華経を真読に誦せられける事有とかや

四 信虎家婦罷去凋議事 并 五臣会議諌信虎之家事

楚人申包胥が言に天定而して後人に克人定而して後天に勝
といへり暴悪不仁の人といへども一時附城して栄ゆる事あり武田の家
も信虎悪逆の名は天文六年中すでに一族類葉の人々城下に
攻籠まで今は甲州の内に信城討てのなく駿河の富士郡下方郡として

甲越
103

切なる信州の平賀源心亡し。佐久郡の地中でも劫犯し、残忍心の侭なり
みならず寄ふ服せざるものあらバ、又累代忠臣の人々といへども小科の為身上を
没収せられ、或ハ誅せらる。剰へ嫡男晴信智謀計略万人に超絶したるが
故、誅をいれんとして二男次郎信繁に家督を譲んとはかる。去る正月既に
左馬介と改め、其後ハ晴信君を遠ざけ、しかも一年ても其失あらバ足出
だして横目の者を付置かれけれども、行状寛容にして少しも過失
なく、其素いかんとなく、去る天文七年とらぬ所の信虎いよく家嫡廃去の
憤入悉く追て家督をせんと思ひ、新に今川家と当時足利の一族なれば
て代々諸礼故実の家なれバ、諸礼稽古として旅さ書き彼家に遊び
やつて甚行ふへく信繁に家督を定んと思惟一定し、正月廿日頃駿河に
行く時、晴信が方へ来りやさんとて晴信を、本義理の嫌あれとも任虎

もせられ、今川家拾別親睦なるも因て間柄なり。其性愚なりに在あだ
世の中には辺鄙の国に成長せしあれや、何となく物毎無骨なる所ありて武陵
自然上洛して大樹などへ御目見えしても田舎人なりとて京家の人に嘲らるべくには
非ずなれバ、速に駿河に赴き義元に随ひ、二三ケ年が間も諸礼作法等を見
習ひ、万事義元に育てられ其あるべき中に今川家へ老をたのむべし。有れ
信繁をして晴信君廃去せらるべき沙汰起りしが、内々に覚えるといへども敵
して必ずも彼ぞんやがて晴信の御方へ来り、つぶさの由演説して晴信の
召を呼び、忙然として信形が説をとくと聞し召し、善悪もなるしが猶も川が信に
を近く言ふ。唯今某は今川家へ遣しあへ彼の下意なる晴信を追ひ
因て石の信ふ左馬介ふ家督を譲りあらんとの結構とこれを覚え候ま、没伸
内意を知ずる事なるあらバ、隠さず知せよとの事なれバ信繁騒ぎなう

甲部
105

晴信葬源心首級

より世に成まかるハ御敍の思召にあらせられ候とも君ハ御賢慮にて
某が存意にかまはず晴信に符合仕まつり縦令何様理を尽し諫まつるとも
思召に叶ひ御気性にあらねバ述懐をなし諷諫仕るとも只甘利殿籠
お欽富兵粮お補など然も石宮から御評定を立られバ当家去之
の計策相立べし侍大将共の縁にも某よ紛しくかく経て之
帰て信虎の前に出御の節申上し不甲斐なきとも延引不労ハ
わすれ世の人だにおし使く申しまうべ早速後が御承あるべしとの御返事
なりと申あげ信虎不興の顔もちにて晴信の聡明なる仕様の甚の
のひしれやせ思ひ当りのひろん殺く一言の應諾もなかりしが時晴信
板垣の方に八審諸の旨ありと甘利備前守飯富兵部お補を人を
石よ召られ次に穴山伊豆守信友に外戚に付て叔母の親み有ければ

これ誠も板垣のひに山田備中守ともに寄ら後に信虎に今日
の催しをすすめ諌めれよりて人々と誘ひ晴信の前に出て近習の人を
遠ざけ晴信人々に向ひて拙者も信虎君其代廢し信繁に家督
衆勢力を讓んと思ふて年数を不穀年来維和の如に晴信一國と添
居て才様信繁は十倍の器をも才智あるとも渠ハ二男にして
却而く只長子なりて世に稱するにも信虎を様ぞ長子を捨て廃子を立るにて
世間の理に遠り斯なき亡なく風流を尽し當時當家が盧と倒るるの侫
列に材ぞ本當に飯寄にて益ある何とそかも見て折らし信虎が家に成る
と廢去し人もし一致せんば時に乗に甲州へ乱入せんも隣方一門に離反
し攻寄るは家の危急も成るん然ば國は変じ忠臣を退く一身の他
國に流浪しいるかる山野に餓死とも家の示着なれバ惜に先武田

の河東古とも家嫡ちかひに甲斐國を滅亡せしかど万代の後までも恥辱を受

のちん〻歎しれ事なりけれや汝等兄弟庵いかで思ふやせむ一度武晴を頼みくは

五人手ひに面を見合せ一言も出ざりしが其利信義も進んで申さく

武慶て二子を元愛不溺まて國を失ひしも父が淫も甚例すに似

戦國の世にも一家を起ても年齢長じ家柁柄を取り他國の敵に國を

奪れざる人に家を嗣せ事を第一と念ぶ念は常さしく注意所

ならひ上下俱に才智武勇ともに兼備せるをかひ其小体にて勝

廷の宗に御家督儀をなる不得り縁に源氏に天魔破旬の入替たる

と申者なく人々の測度をなせバ家に於いて御大事也と思ひ

ひと〻御父を得り中に其公の第一とにまつりて席を立くして

あれバ穴山伊豆守宗おもって頭を傾け居たりしが深く進みて

信達の御仰は作り不存の御中さてん入身の後継を願ふに何そ今は何あらう

作らざる今御代の下に我人何二つうかう智者有も未着者の目礎に

自ども有り唯今此分にて当家頭滅亡ふあり其上信繁家督に

知し卒遣ふばへ諸國ふ大敵ば引受一年しも國を抱ふ事ありて成

丸を信虎公と廃去しまで信玄公出は事なく近き事より千里百

計をかりても別の計儀なし如言成敷て申されけるが小山田板垣飯富家何れも

一同再言をなへ穴山殿の所勘極まれり速に思ひきまらんと武田宗庵

急存亡の秋なりとまでもなる不機嫌に兼ひ給ひてふ事も知るぶる

淫定を宗やの哉父母の悲何とても言ひしせ其とも別にて父の悪と言ふし

とれが父に君なきまくさるしやを父とも親しめとば母に至るまで親しくせ

ねども有るうとば父よく云る親の義を立てりてなやがまんなる悪ある父を

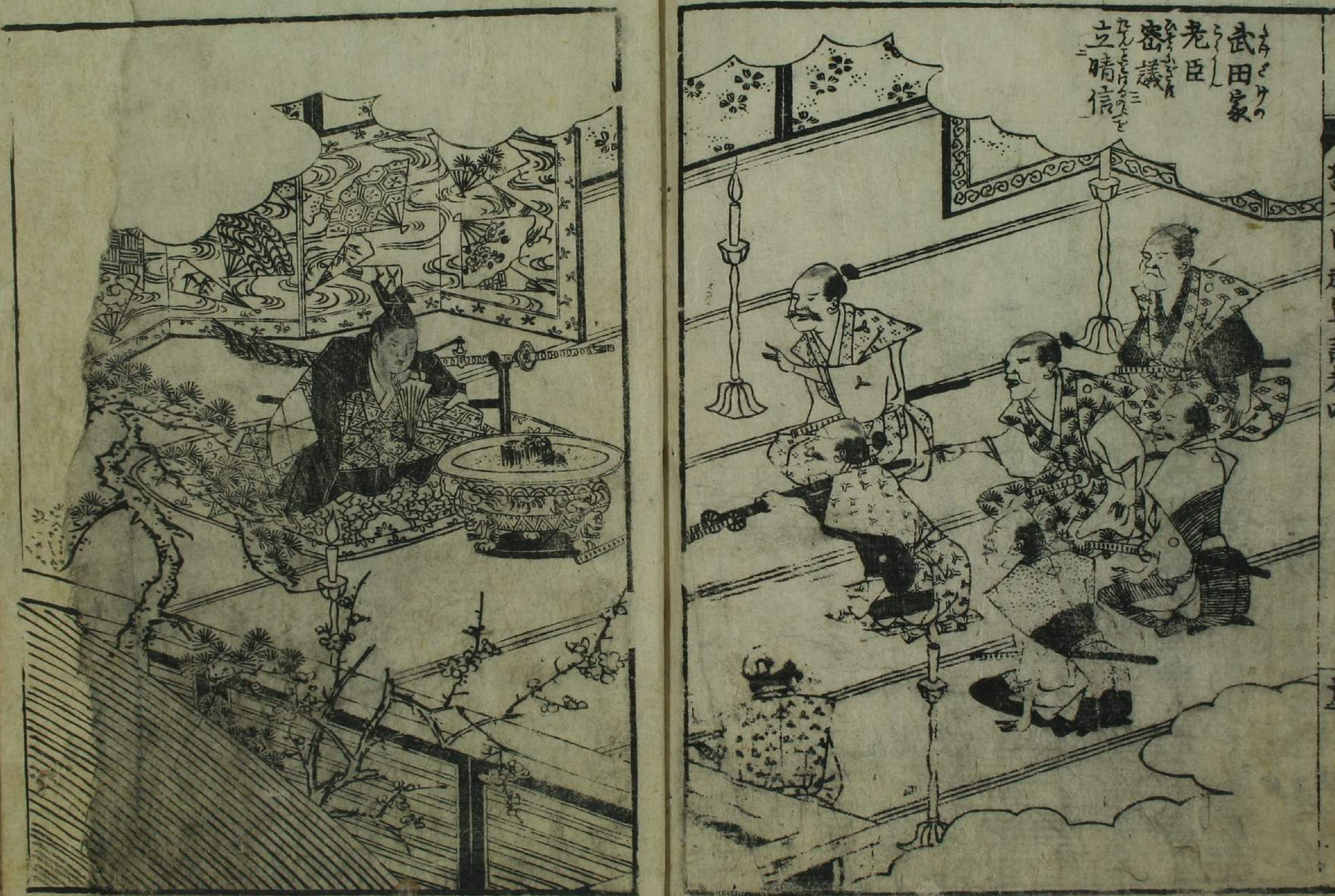
廃去し、不孝の働きをなしなば、天神地祇の神罰を蒙り、悪名を海内に流さん。此事を進退を定め給ふべし。[illegible]

のみならず、山国端中も悉く日来悪業を憂ふ。御孝心は道理至極なれども、今信虎公を廃し、遠く国を追ひ給はざる時は、忠臣悉く去り、百姓も離れ、恨みを抱き、他国の侵す所となり、国を亡ぼし給はん事眼前なり。続く代々連綿たる御家、信虎公の代に至りて滅亡せん事、嘆かはしからずや。御先祖代々の御霊に対して、大不孝の君と成り給ふべきなり。[illegible]

剰へ代々の家業を失ひ、今は流浪の道路に迷ひ[illegible]君の家も出奔[illegible]来る数ヶ月の御手討を恐れ[illegible]用ひられざる事を察し、遂に国の興廃を天命に任せ見捨てたる

のみならず、それ實は忠臣の所為にあらず、[illegible]家の御先祖よりこのかた累代の禄を[illegible]、所謂世臣として二代の君に仕へ、其君無道なる時、食禄を抛て諫むれども、墨子が曰、君社稷の為に死せる時、是に[illegible]是本意なり。無道の君は其命を[illegible]他国の籠臣となるとも、臣の職分にあらん。然も人に数代の御家業断絶あらば此国を去る事、忠臣の職分なり。今日既に廃去の計略を与へ給はずば、多くいふとも国家は頽敗せん事目前にあり。思ひ給へ、[illegible]援けるが仁と申すべけんや。唯今君の御心は至孝なりとも、[illegible]満足の[illegible]父君を亡ぼされ、御先祖代々の[illegible]新羅三郎の嫡流の家系ここに絶し、国々の盛衰[illegible]悪ありて国家は[illegible]その[illegible]才智勇[illegible]

109
甲越



具足なりとも。計策も有べき其の地[illegible]を見するなりとぞ
こひしろは何事もなく情なくも及べし。信[illegible]あるにおよぶ[illegible]
論ずるに及ばず。只願ふ事あり。安寧として穏なる事[illegible]
且又君臣の信ありて。尊せる計策を巡らさば。其国家慶[illegible]
縦令城千載の下に残るとも。その悪名つく道理と思ふべし。[illegible]
理を尽さしまゝ。晴信一旦の悪名をさへなしたまはゞ蒙[illegible]
主[illegible]入る事ぞ。五人の老臣互ひに目くばせ見合はせ[illegible]
まことに是迄也。其後程なく寄合[illegible]
唯今此事にて。当家代々傾く事一両年の間に至りぬ[illegible]
信虎[illegible]言ふ事[illegible]
[illegible]国を去りて如[illegible]一文[illegible]

虎頼[illegible]家嫡嚴去の芽しるしてかくて晴信の方へ使者を[illegible]
同[illegible]世上暇なきをもて[illegible]
二月九日五人の老臣[illegible]しく晴信の方へ参り御対面下され[illegible]
信[illegible]定と思し[illegible]
互に[illegible]板垣甘利小山田飯富[illegible]
宍戸[illegible]
信虎公[illegible]一[illegible]
晴信面に怒りを発し[illegible]
信[illegible]計[illegible]
なほを板垣駿河守晴信の袴の裾を取[illegible]
奉りしが。先の一言ありて[illegible]

るゝは虎云ごとく如是の法行跡にて何しくも已国城持るの外
して家臣にまかせる事法の厚さくば何事も成就なる事なく候ぞ
今日ありて此国を退去仕らんと妻子老少は長別を告て此御付出る君
国城捨て去其国を甚平仕らば育てられける忠臣は君臣の道なく
孝子の道を尽し給へ古来より為すまでも一統法様の道ありて其利ぶ
山田君は纐力と底上の城は活度利を枝葉一面は晴信を招し今生の
執今日ありて愛存あるせばしく其度滅し嘆ひ切く底を退んとを法
有様は晴信なくさに敵されども滅を為しぱ責めらる我用ひざる
由へあくねがもぱすてるのおを去るようの穏なく徳を拒めりぱ山田殿中
ら奴家兵殺お補言城主にて父は守く子は不孝の子とし君は守く臣
城不忠の臣とやせば我くども法度を廃去仕ることは天下の人君を臣の不

孝せしは君臣は忠臣とし称甘んせば法者も同く不忠の臣を罪する法度し継
不忠と申するは国の興廃は換はる時は宮ひあるは異なる
者いするる綱里城地し度しまうてぞ宛山守立ちの日事そ
評議いれ持くいかりして信虎君城攀し今川殿の取立てし
今川義元を頼み縁府に移く押込まいらする縁めるうかは事なく身付
させられし公は定め被仰付けし此義は我くいわもう網殊仕らし
而して晴信を捨て面を掩ひ拵はぱ人倫の面目に中なお申請
の冥罰晴の中におらんぱ上は左も右も無れ取りの為に
作なれば其日より宿所は出て帰なる

繪本田代草紙巻之四 終

池清